



リビング Interview インタビュー

近隣地域から離島まで ニーズに応える病院に

鹿児島徳洲会病院 院長
保坂 征司 さん

PROFILE : ほさか・せいじ 熊本大学医学部卒業後、同大学外科に入局。2009年福岡徳洲会病院に勤務。一旦、徳洲会を離れるが離島・へき地医療への思いから復職。19年宇和島徳洲会病院院長就任。23年から現職。日本外科学会外科専門医、日本消化器外科学会消化器外科専門医

1987年の開院以来、地域に密着した医療を展開してきた「鹿児島徳洲会病院」。2021年12月には南栄に新築移転し、変わらず地域のニーズに応える医療を提供しています。

同院の重点医療は「救急・災害医療」「リハビリテーション」「へき地・離島医療」の3つ。「特に救急医療については、周辺地域から需要の高さを実感しています」と話すのは宇和島徳洲会病院から、今年4月に赴任した院長の保坂征司先生。鹿児島市南部や南薩エリアからの搬送を中心に、その件数は旧病院の約3倍、年間2500件を超える数になっています。「どんな患者さんも断らない姿勢で受け入れて治療を行っています。まだまだ不十分。多様な救急のニーズに応えるためには、循環器内

科、脳神経外科、整形外科をさらに充実させ、当院で完結できる治療を増やしていきたいと考えています」

「健康と生活を守る病院を理念に、60人のスタッフで充実したリハビリテーションを実践。「高齢の患者さんも多く、せつかく病気が治っても、体力の低下で元の生活に戻れないということがないように、質の高いリハビリを提供し、地域に戻っていただいています。地域密着の病院として、手術後の超急性期のリハビリから、回復期、在宅リハビリまで一貫して対応できることも同院の強みです。」

縁ある地で力を尽くしたい
福岡生まれの保坂院長ですが、これまでの人生で常に意識してきたのが西郷隆盛と稲盛和夫さんの言葉なのだとか。「先達を輩出し

た地に来たことも何かの縁でしょう。というより、へき地・離島医療に携わっていききたいと徳洲会を選んだ私ですから、離島の多い鹿児島には「来るべくして来た」のだと思っています。今後は院内の医療の量と質を高めつつ、その医療を離島にも提供できるように病院づくりに力を尽くしていきたいと話します。

文字にすると、堅いイメージですが、終始笑顔で気さくな口調で語ってくれた院長。「病を治す場所ですから変かもしれませんが、「また来たい」と思ってもらえるような、地域で信頼され、必要とされる病院を目指していきたい」。プライベートではギターを演奏。「患者さんに喜んでほしい」とスタッフとの院内コンサートも計画中です。

(編集部 青盛智子)